

冬の桑畑と桑の剪定

東京農工大学農学部蚕学研究室

准教授 横山 岳

冬の桑畑は人気も無く、閑散としていている。黒沢明監督の傑作「用心棒」(1961)を観た方は多いと思うが、冒頭のシーンを覚えておいでだろうか。三船敏郎が閑散とした冬の桑畑の中を彷徨う(さまよう)シーンから始まっている。江戸末期の上州でヤクザの抗争の宿場が舞台であり、その周り是一片の桑畑である(ロケ地は群馬県ではなく山梨県だったらしい)。冬の桑樹は落葉しており、地面から30cm位の株から条(枝)が無数にまっすぐ伸びているだけである。名前を問われた三船敏郎是一片の桑畑を眺めながら「俺か、俺の名前は、、、桑畑三十郎、、、もうすぐ四十郎だが」と名乗っている(「用心棒」は「椿三十郎」の前作にあたる)。

暖冬となった現在でも冬の桑畑には桑葉がない。初冬に霜が降りると桑葉は一気に黒くなって落葉する。桑葉もなく、蚕は卵で休眠(越冬)しているので、養蚕農家は蚕の飼育をすることは無い(蚕を孵化させ人工飼料で飼育することもできるが、人工飼料代は高く、全齢飼育は今の養蚕業としての繭生産には向かない)。冬の間、養蚕農家の仕事といえば、桑畑の管理である。

夏以降の飼育のために、条を剪定する「春切り」(別名:彼岸切り)を行う。前年に伸びた条の根本からばっさりと伐採する。冬に剪定しなかった桑樹は春の飼育に使う。春の飼育後、使った条を「春切り」と同じように根本から剪定するのが「夏切り」である。このように桑畑の桑樹は年に1回剪定されている。図1、2は農工大の桑畑での「春切り」と「夏切り」の作業風景である。蚕学研究室の教員2名、技術職員1名と年によって異なるが7、8名の学生で自分たちの桑畑(約3千本)を管理している。条を根元から伐採して、丸坊主にする枯れないか毎回心配になる。しかし、桑樹は丈夫なもので「春切り」した桑は4月中旬芽吹きの際に新しい条が伸びてくる。気温が上がるにしたがって1日1cm位のペースでスクスクと育っていき、秋には2m位の高さになる。

桑樹を剪定しないとどうなるか?

大木になっていく。図1、2は20年前に造成した桑畑で、「春切り」と「夏切り」を毎年しているので桑樹は人の背丈ほどしか伸びていない。図3は20年前に桑畑を



図1 春切り

造る際、余った桑苗を敷地の隅に植えて、そのまま放置した桑樹である（最近、流石（さすが）に高くなりすぎて先端部を切り落とした）。幹の太さは周囲約 150 cm もある。桑畑のものは同約 30 cm で、同じ時に植えた桑樹であるが、放置した桑樹の幹は畑のものに比べて圧倒的に太くなっている。桑樹を「春切り」と「夏切り」と繰り返して剪定すると使い勝手は良いが、やはり桑樹の成長には良くない。いくら桑樹が丈夫だとは言え、剪定を行っていると折角生やした葉や枝を毎年失っているので樹勢



図2 夏切り

は衰えていき、だいたい 20 ～ 30 年で改植が必要となってしまう。現在使っている桑畑もそろそろ改植を考える時期にきている。図 4 はブラジルの桑畑であるが、根本から大きな芝刈り機のような収穫機で桑を収穫している。このような収穫方法ではさらに桑樹の寿命は短く、10 年ほどで改植しているそうである。しかし、挿し木で増える桑品種を使っているので改植の手間はそれほどないとのこと。ちなみに現在の日本の桑苗はほぼすべてが接ぎ木で作られている。



図3 20年前に植えた剪定していない桑樹とその幹



図4 ブラジルの桑畑

剪定が行われる以前は「立通し」と言われる仕立て方が行われてきた。桑樹を剪定することなく、図5の浮世絵のように大木になった桑樹を用いていた。踏み台や梯子(はしご)を使って桑葉を収穫し、太い枝は切らずに残してある。大正末期まではこ



図6 立通しの桑畑



図7 立通しの桑からの摘桑(熊谷元一氏撮影)

資料：株式会社岩波書店
『かいこの村：岩波写真文庫 84 (1953)』による。



図5 浮世絵に描かれた桑摘みの風景

のような桑樹の桑畑が多く残っていたようであるが(図6、図7)、昭和期になると葉のついた条ごと蚕に与える「条桑育(じょうそういく)」が普及して「立通し」の桑畑は日本からほとんど姿を消した。

桑葉をこつこつ摘んでいるより、葉のついた条ごと収穫し、給桑した方が当然効率は良い。「条桑育」では繭質が若干悪くなるが、飼育効率が良い分大量に飼育が可能のため普及し、前述の「用心棒」が製作された昭和三十年代に年間条桑育が確立した。桑の収穫が「桑葉」を摘む作業から「太い条」を鎌や鋏で伐採する力仕事になって、担い手も女性から男性へと変わっていった。

外国では

まだ「立通し」のような桑樹が使われている。ウズベキスタンは繭生産が2万tと世界第4位の養蚕の盛んな国だが、剪定されていない桑樹も用いている。桑畑も造成されているが、自生している桑や桑並木の桑葉も利用されている(図8)。



図8 ウズベキスタンでの桑摘み風景

桑の剪定はいつから行わるようになったか

江戸時代末期に上州(群馬県)で始まった。「根切り」という仕立てで、現在の「根切り」の剪定とは異なり、地面すれすれで剪定していた。繭生産の増大が望まれ、新たに桑畑を作った際、桑苗を植えてから早く収穫できるように剪定されていたら

しい。このような桑樹を剪定する栽培法は徐々に広まっていき、試行錯誤の末、現在のよう「春切り」や「夏切り」のような桑の剪定方法が確立されたのは、前述したように昭和三十年代である。

話を冒頭に戻して、「用心棒」の桑畑は昭和期の条桑育用のもので、江戸時代の桑の仕立て方とは違っている。完璧主義とも呼ばれる黒澤監督は、妥協を許さない厳しい演出で知られているが、流石(さすが)に江戸時代の桑畑までは再現しなかった、またはお存じなかったようである。もっとも図6のような「立通し」の桑畑を観ても誰も桑畑とは思わないだろうし、「立通し」の桑畑を彷徨う三船敏郎ではちょっと格好がつかないだろう。

■横山岳(ヨコヤマ タケシ)のプロフィール
東京農工大学農学部
生物生産学科蚕学研究室
〒183-8509: 東京都府中市幸町3-5-8
TEL: 042-367-5681
E-mail: ty.kaiko@cc.tuat.ac.jp
HP: <http://www.tuat.ac.jp/~kaiko/>

【No.40(2015.1)号の記事訂正】

前号(2015.1)P.29の右段下から7行目
誤: 一度爲殻。
正: 一度爲鼓。